

【旧約聖書日課】列王記上 10章1～13節

¹シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。²彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、³ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は一つなかった。

⁴シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、⁵また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

⁶女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。⁷わたしは、ここに来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことをはるかに超えています。⁸あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってあなたのお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。⁹あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです。」

¹⁰彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった。

¹¹また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。¹²王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための堅琴や琴を作った。このように白檀がもたらされたことはなく、今日までだれもそのようなことを見た者はなかった。

¹³ソロモン王は、シェバの女王に対し、豊かに富んだ王にふさわしい贈り物をしたほかに、女王が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。

【使徒書日課】テモテへの手紙一 3章14～16節

¹⁴わたしは、間もなくあなたのところへ行きたいと思いながら、この手紙を書いています。¹⁵行くのが遅れる場合、神の家でどのように生活すべきかを知ってほしいのです。神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。

16信心の秘められた真理は確かに偉大です。すなわち、

キリストは肉において現れ、

“霊”において義とされ、

天使たちに見られ、

異邦人の間で宣べ伝えられ、

世界中で信じられ、

栄光のうちに上げられた。

【福音書日課】 マルコによる福音書 8章22～26節

22一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。23イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。24すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが分かります。」25そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。26イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

「人が見えます」【こども説教のために】

主イエスと弟子たちの一行がガリラヤ湖を舟で渡って、ベトサイダという村に行かれたときのことで、病人を癒したり、悪霊を追い出されるといった、不思議な働きをなさっていた主イエスの噂は、この村にも知れ渡っていたようです。一人の盲人が連れて来られました。どうも、本人の願いというよりは、周りの人々がその人のことを気にかけていたようです。「この人に触れてやってください」と、人々はその盲人を主イエスに引き合わせました。すると、主イエスは、その盲人を村の外に連れ出されてから、その人の目にご自分の唾をおつけになられ、両手を当てられたのです。「何か見えるか」と主イエスがお尋ねになられると、その人の目は見えるようになって、言いました。「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが分かります。」

主イエスは、すべての盲人の目に見えるようにされたわけではありません。けれども、主イエスにお会いして、その御手に触れていただいたという経験をした人は皆、ひとつの大切なことが見えるようになりました。「人」が見えるようになったのです。自分のことしか見えていなかった人も、名誉や財産しか見えていなかった人も、それまで目の前にいる一人の人を「人」として見ることができず、いたすべての人が、その一人を「人」として見るようになることができました。わたしたちは、今日も、そのような主イエスにお会いし、御手で触れていただくために、教会に集められてきたのです。

村の外へ！

盲人の目が見えるようにされるという奇跡は、いつの時代にも驚くべき出来事です。1世紀後半から2世紀にかけて生きたローマの歴史家タキトゥスは、ネロ皇帝の死後の混乱を経て、エジプト・アレクサンドリアで皇帝に推戴されたウェスパシアヌスが、ローマ行きを待つ間に、乞われて貧しい一人の盲人の目が見えるようにする奇跡を為したという逸話を伝えています（『同時代史』IV-81）。その盲人は「神託を受けたので、あなたの唾をわたしの目に塗ってください」と願うのですが、ウェスパシアヌスは、そのような迷信は信じないと言って、最初は応じません。しかし、医者 の助言を受け、自分が皇帝に推戴されたという幸運によりすべては可能になると信じようと言って、願いどおりに盲人の目に自分の唾を塗ってやります。すると、その盲人の目は、瞬く間に開かれ、見えるようになったというのです。

主イエスも盲人にご自分の唾を塗ってやって、見えるようにされました。主イエスが為された奇跡を、ローマ皇帝も衆人環視のもとで為したと聞いて、皆さんは、がっかりされるかもしれません。けれども、同様の奇跡話は、古今東西、少なからず知られてきたことでしょう。

そうであればこそ、わたしたちは、主イエスの奇跡が何をお示しにされるためのものであったのかを理解することが大切です。

「**何が見えるか**」。そう問われた主イエスに、唾を塗っていただいた盲人は、「**人が見えます**」と答えました、「**木のようにですが、歩いているのが分かります**」と。主イエスがこの盲人に見えるようにされたのは、間違いなく「**人**」でした。それは、はじめおぼろげに「**木**のよう」に見えていたといえます。けれども、その「**木**のよう」なものが「**歩いているのが分かり**」、それが「**人**」だと認識し始めたのです。主イエスがもう一度両手をその目に当てられ・・・、よく見えてきて・・・はっきり見えるようになったとき、彼がはっきりと見えるようになったのは、他でもない、はじめはおぼろげに「**木**のよう」に見えていた「**人**」の完全な姿であったでしょう。

この人が見えていなかったものは、「**人**」です。「**人**」がそこに居ても、「**木**のよう」にしか見えていなかったのです。「**歩いている**」ことさえ認識せず、まるで立木の一本のように、目の前の存在をみなしていたのではないのでしょうか。わたしたちが、何千という人の行き交うターミナル駅の雑踏を、まるでうっそうとした雑木林の中を抜けていくようにして通り過ぎていくように。

主イエスが、この人を、その「**村から外へ連れ出**」され、最後に「**この村に入**っては**いけない**」と言われたのは、その村こそが、この人の目から「**人**」の姿を見えなくさせ、「**人**」を「**人**」として扱わなくさせていたところだからではないのでしょうか。

あなたの家へ！

いったい、この「村」に何があったのでしょうか。この「村」で、この人は何を経験していたのでしょうか。

この「村」には、主イエスの御目から見て明らかに問題があったのでしょうか。「ベトサイダ」という村、それは、「漁師の家」という意味の地名ですが、主イエスや弟子たちの時代には誰にも知られた、その「村」の問題があったのかもしれませんが。「人」が「人」として当たり前にならず、まるで「木のよう」に数えられるだけの存在として互いをみなしているような現実が、あったのかもしれませんが。

いいえ、それは決して、わたしたちと無関係のことではないでしょう。そのような「村」は、わたしたちの現実社会そのものです。「人」を「人」として見ていないのです。まるで「木のよう」に、立ち並び、数えられ、衝突しないように避けられるだけの存在としてしか見ていないのです。「否、わたしは、どんな人のことも、人として見えているし、人として向き合っている」と、自信を持って言える者があるのでしょうか。

主イエスは、あの盲人の目の上に、両手を置いてくださいました。両手をその目に当ててくださいました。主イエスの御手が、その人の目を導いてくださったのです。主イエスが教えてくださったのです。「人」を「人」として本当に見えるようになるとは、どういうことか。どうしたら、「人」をよく見えるようになり、はっきり見えるようになれるのか。わたしたちの見るべきものが何であるのか。それを、教えだけでなく実践によって導いてくださったあのお方の御手が、その人の目の上に置かれたのです。あのお方の御手が、わたしたちの目の上にも、置かれているのです。

その御手が、両の手が、わたしの目を覆います。今まで見ていたものを忘れさせるように、両の手がわたしの目の上に置かれます。目を閉じるのです。主の御手は、わたしの目を覆い、閉じさせるのです。もう一度開かせるために、もう一度、本当に見るべきものが見えるようになるために。

主イエスは、目が見えるようになった**その人を家に帰**されました。人が見えるようになった者は、村に留まらずに、家に帰されるのです。いいえ、家に遣わされるのです。その家で、人を人として見るようになるためです。その家が、人を人として互いに見ることのできる場となるためです。

その人が帰された「家」は、どのような家だったのでしょうか。肉親の家族のいる家でしょうか。神の家族の集う家でしょうか。行き場のない人々の辿り着いた家でしょうか。

主イエスは、あなたの「家」にお遣わしくくださいます。人が人とされる「家」です。今日、あなたが遣わされるあなたの「家」は、どこですか。